

—特別講演—

## 北海道に於ける製材工場の経営合理化について

宮原省久

去る10月2日鋸目立技術教習所の開所を記念して、日本木材加工技術協会北海道支部、北海道林産技術普及協会の共催にて製材に関する特別講演会が催された当日は講師として、日本木材加工技術協会理事、宮原省久氏が“北海道における製材工場の経営合理化について”と題して下記の講演を行った。



## 講演要旨

私、只今御紹介に預りました宮原省久でございます。実は私此の度北海道から、何か来て話せとお話しがあつたのでありますが、非常に恐れ入つた訳でございます。と申しますのは、北海道には、林業指導所、それ

から林業試験場北海道支場や、その他の諸先生が沢山いらっしゃるし、又業界に致しましても、非常に立派な工場が沢山ありまして、いずれも壮々たる経営者の方々ばかりで、私は常に敬服している次第でございます。そこへ参りまして「北海道に於ける製材工場の経営合理化」ということを題目として、ダンビラをかざしたところが、それは全くコッケイ極まることに終るだろうという気持があつた訳でございます。然しそれはそれといたしまして、そういうお歴々の中におきまして、私のような者でも、常々考えていることを卒直に申し上げ、又特別の見方、恐らくそれは、クダから空を見るような見方であるかも知れませんが、何れにしましても、私が北海道のことに關して、こゝでお話しをして、お答を受けるということが、一つの何かのお役に立てば幸いなことと考えて参つたのであります。之れから私がお話し申し上げることは、非常に雑駁なことでございます。恐らくその間には前後矛盾し、又非常に見当違いのこともあると思います。こういう点については、どうか御叱正願いたいと思います。私はこゝで決して講演をするというような大それた考えでは参つて居りません。一つその点重々お含みの上御聴取願いたいと思います。

さて北海道のことを申し上げる前に私が考えます日本における製材工場の全体について申し上げておくほうが、話しを進めて行く上に都合が宜しいと思ひまして、蛇足と思ひますが一寸前置きさせていただきます。

## 過剰な馬力数

御承知のように日本の製材工場は、現在その数が3万を超えて居ります。馬力数も72万馬力という沢山の馬力を擁しておりますが、然し此の3万という工場が一体どのような形で動いているかを見た場合、非常に意外のことにぶつかるのでございます。といふますことは私の非常に粗雑な推定でございますが、3万という工場があつて、72万という大きな馬力を擁しておりますと、現在日本で生産して居ります丸太の約3倍位の量を、工場へ持って行かないと、恐らく工場は一応の円滑な運転が出来ません。又、若しそういうことをやつた場合には、我が国現在の木材需要量の2倍位の量が市場に流れて参ります。

吾々は普段原木高の製品安というよふなことを云つておりますが、若し之れが、反対に原木が安く、ふんだんに提供されましたならば、製材工場はフルに操業して、その結果製材工場の利潤はどんどん上つて行き又製材工場の合理化もどんどん出来ると云うことになる訳でございます。然し若し仮りにもそういうことが行なはれた場合には、たちまち過剰生産がそこに現われまして、現在の原木高の製品安で苦難して居ります場合と違つた形の苦難が現われて来ることが、予想される訳でございます。

勿論そういう場合にも品物が安くどんどん提供されますと、現在とは違ひまして、木材の用途も拡大されましようし、又住宅難等の問題にも大いに貢献するところがあつて、結構ではございますが、然し何れにしましても、製材工場の馬力の多すぎるといふことは、どの面から見ましても一つのこれは問題点であると思ひます。

普通計算されて居ります数字によりますと、日本の製材工場は、一工場当りの平均馬力は23.39馬力、1馬力当りの1日原木消費石数はなんと0.75石でございます。又労務者一日一人当りの原木消費は2.49石約2.5石位になっております。

一馬力当りの一日の原木消費が0.75石といふこと、これは皆さんの工場の実体からお考えになりますと、

非常に少ない。そういうことが一体統計上ではどうして現われるのだろうという疑問が生れて来ると思いますが、製材工場の中には稼働時間が非常に短いものがある。若しくは稼働が不定期のものがある。手持の原木がないとか、或いは販売上の色々の問題があるとかで、充分能力が発揮出来ない工場が意外に多い訳でございます。私北海道の様子につきましては詳かではありませんが、本州に於ける製材の中心地と云われております静岡県、或いは和歌山県におきましても、その製材工場の実態調査に参りまして色々お話しをきいて見ますと、0.75石の一日一馬力当りの製材工場はまだ宜しい方で、この半分位の工場が、少なからず見受けられる訳でございます。最初は調査に参りまして御報告下さる製材工場の挽材率が非常に小さいので不思議に思い、或いはこれは私と、税務署の関係とが関係しておいて、私に本当のことをお話しすると、私の書いたものとか、若しくは私の話したものから、税務署の方えつつ抜けになって、税金に影響するので、私には低く目低く目と、御説明下さるんだというように邪推をして、皆さんのお話しを承っていた訳でございます。これは私として誠にまずい考えでございました。実際数ヶ所の工場え入りまして一日の記録を集めて見ますと、やはり0.5石位の製材しか挽いていないということは、茲に出て参ります0.75石というものはやゝ真実に近いものであって、之以上の製材はしていないだろうということになるのでございます。

何れにしましても製材工場が型の大き過ぎる馬力を擁して、その馬力が然かも半ば有休状態にあるということは、なんとしても製材工場の合理化における一つの大きな問題点だろうというように考えて居ります。

#### 北海道は大規模工場

昭和33年6月の農林省統計調査部の調査によりますと、北海道の工場数は1,240と出て居ります。これは全国の工場数3万に対しまして約4%となつて居ります全国的に見て馬力を考えず只製材工場の数のみを考えた場合には、1,000以上の製材工場を持って居る県は新潟県が約1,100、長野県が1,000、岐阜県1,000、静岡県が1,100、愛知県が1,000、広島が1,100であります。しかしこゝでは全く小さい15馬力か20馬力という工場が普通でそれ以上の工場は一応大工場として扱われています。製材工場は極く小規模のものが普通である。又そういうものでないとこの諸県では殆んど仕事が出来ない訳でございます。

北海道の製材工場は全国の総工場数に対する僅か4%という低い数でございますが、之れを馬力数において見ますと全国の72万馬力に対しまして、6万3千馬力

となつて居ります。これは総馬力の8.7%に当りますので北海道の製材工場は非常に規模が大きいということになる訳でございます。本州諸県におきまして馬力の大きい工場は、これは静岡県が第一番でありまして3万1千馬力を持って居ります。之れは北海道に比べますと約1/2であります。愛知県がずっと下りまして2万9千、日本における最大の木材王国と云われております秋田でさえも僅か2万5千に満たないという状態でございます。天竜を控へて居ります静岡が3万で、愛媛長野が共に2万4千であります。

#### 本道の広葉樹消費は全国の28%

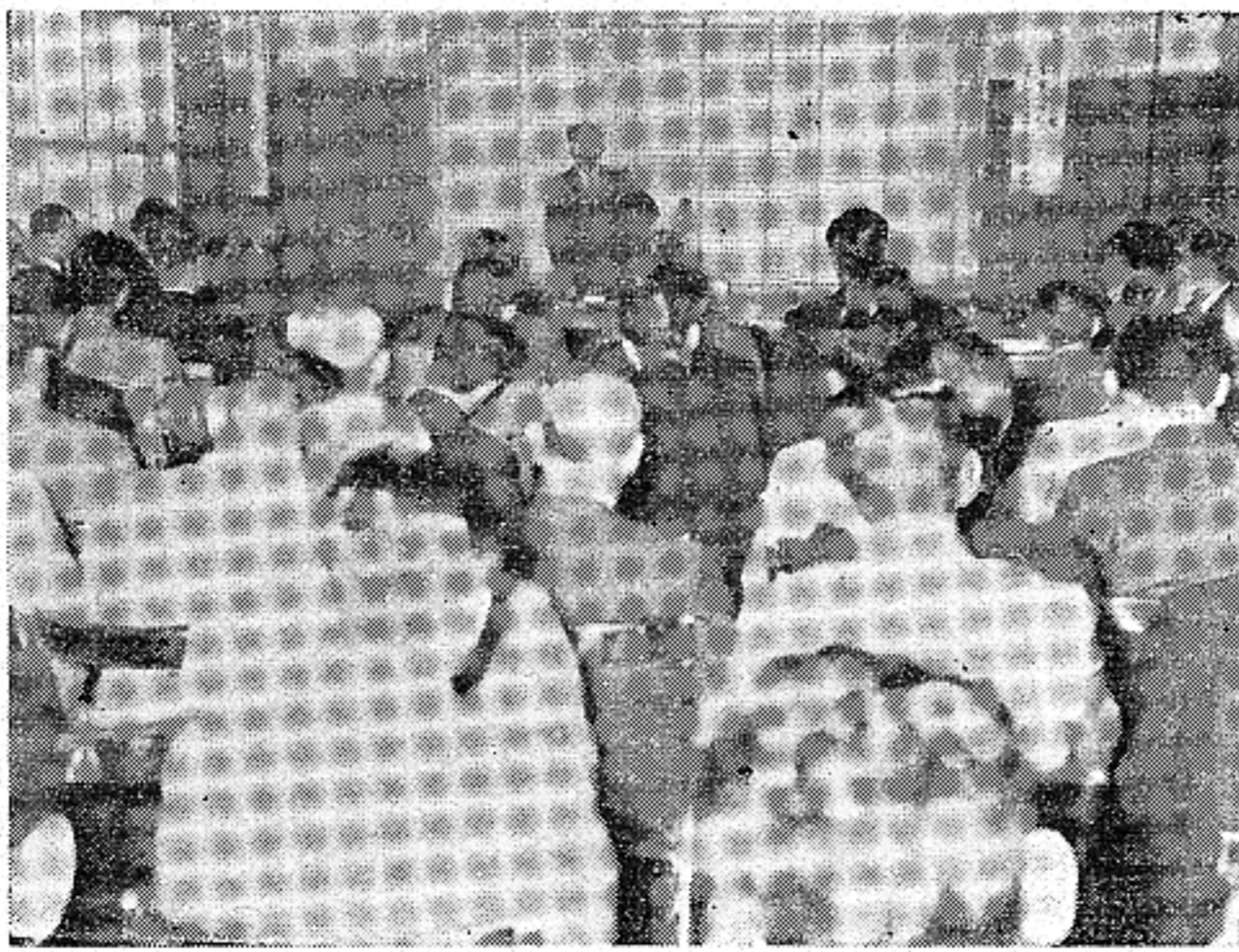
馬力の状態は以上の通りであります。之れを製材の消費石数から見ますと、この6月を例にとりますと、北海道では129万7千石という数字が現われて居ります6月という月がどういふ月か私は良く存じませんが、とにかく莫大な能力を発揮して居る訳でございます。これを全国の33年6月における消費石数から見ますと14.3%という数に当つて居ります。その内訳は大體針葉樹79万5千石、広葉樹50万2千石となつて居ります。これは針葉樹の場合には全国の総製材量に対する10.9%約11%が北海道の生産になつて居ります。ところが広葉樹におきましては全国の総原木消費量に対しまして、なんと驚くべし北海道は28.2%という大きな数字を示して居ります。之れは6月のみの数でありますので年間を通じては若干異動はあると思ひますが、とにかく28%という数字が丸太挽材総量における北海道の占めるウェイトでございます。

此の6月を基準にして逆算しますと1ヶ年では1,550万石という数字になる訳で、製材工場の能力の大きさ製材工場における、特に広葉樹における北海道の占める量ということは非常に大きな問題でございます。従つて私がこれからはしばしばふれる問題もこの広葉樹問題を中心にして申し上げたいと考えて居ります。

#### 丸太のまゝの移出は考えもの

北海道の広葉樹生産を申上げることについて、やはり本州との対比を申上げる必要があると思ひます。本州で広葉樹、の製材量の多い県といひますと、東京、大阪、やゝ下りまして愛知、静岡となつて居ります。東京の6月中の広葉樹丸太消費は19万6千石、大阪14万石で、愛知が10万石、静岡6万石となつて居ります。ところが今申し上げました東京、大阪、愛知という県が、このように広葉樹丸太の消費が多いという反面、これらの県では広葉樹丸太は殆んど生産して居りません。恐らく北海道から丸太がもたらされ、それが消費されているということで、そのまゝの製材工場の広葉樹挽材能力というものは、北海道の丸太生産に強く

依存しておるといことになる訳でございます。この傾向は最近では減少しておりますが、戦前若しくは戦争直後の数年間は恐らくもっと北海道の丸太の依存度が高かったろうと考えて居るのであります。従ってもし北海道からの丸太の供給が止まった場合には、東京、大阪、愛知の如き場所の広葉樹製材工場の仕事はずっと減少して行くことになる訳でございます。私はこのことにつきまして何れ後段でも申し上げますが、一体北海道から東京、大阪、愛知、名古屋へ丸太を輸出して、こゝで製材されなかつたならば、此の地方での製材の消費にマッチしないものであろうか、このことが大きな問題になると思います。もっと卒直に申し上げますと、一体高い運賃をかけて丸太を遠くまで運ばなくとも、北海道ですべての丸太を製材して、製品として他の地方へ出すことによりかなり大きく問題が解決するのではないかと、……このことは、いはゆる北海道に対してこういう例をとるのは誠にまずいのでございますが、木材業における後進的の地方では丸太を輸出して、先進的の地方の製材工場の喰物を提供しているのが、世界に於ける木材需給の全般であり、又いゆる製材業における後進国と先進国との関係でありまして、これは各国とも大きな問題となっている点であります。



脱し切れない北海道の後進性

然しこれを北海道の場合にそのままいゆる後進国というようなレッテルを貼ることに対して、私は決して自信を持っている訳ではありませんが、とにかく北海道の場合にはこうした後進国的なという言葉は非常に悪うございますが、後進国的な要素が未だ若干残っているという点は見逃し得ない点だと思うのでございます。

勿論本州、四国、九州におきましても、広葉樹の生産はある訳であります。その生産たるや誠に微々たるもので、本州における広葉樹素材の有力生産県と目されて居る岩手県の場合では6月中の丸太消費は8万1千石でこれは東京の1/2以下であります。更に岐阜県

では7万9千石、福島県で6万石、秋田県で4万8千石で群馬県で4万4千石、青森県が3万4千石、栃木県、広島愛媛、宮崎県となりますと、これはもう3万台になってしまいます。恐らく北海道の大きな一工場の消費位に落ちてしまうということでございます。

岩手、岐阜、福島等の諸県はブナが主でございます。奥地開発と共にブナの丸太が出て参りますから、こうした成績を挙げておりますが、若し奥地開発が行なわれなかつたとしても、殆んど広葉樹は「くりもの」とか或は極く小さな製材工場の特殊資材以上には役割を果していないということでありました。愛媛、宮崎地方になりますと、ブナは無くなりまして、古いタブの木が多く、シイ、タブのような木は、利用の点について中々むづかしい問題がありましたが、こうした贅沢はいつておられなくなり、盛んに使用されるようになったので、このように月間消費が全県を通じて2万石という数字を見ている訳であります。それにしても資源は存外少ないようでありまして、之れを3倍、5倍というような広葉樹の消費力を伸すためには中々容易ではないと吾々は見受けて居ります。

#### 東京は賃挽工場が多い

先程私は東京、大阪、愛知等が非常に広葉樹丸太の消費が多く、然かも北海道からの供給丸太が多いと申しましたが、これと関聯しまして東京では、賃挽工場で製材される分が俄然多い訳であります。6月中の実績を見ますに、その81%に当る数量が賃挽工場で挽かれ約19%が自家工場で挽かれて居ります。おそらく賃挽工場で挽かれる81%の数の中には、少なからざる量が北海道から参っておるのではないかと推察が出来るのであります。

元来東京の広葉樹の消費勢力といえますか、取引の秩序は製材工場を所有している人が、自家工場の資材として丸太を北海道から仕入ているような場合は極く少ない訳でありまして、広葉樹の扱商社、若しくは広葉樹の製材品を、車輛会社又は造船会社等に納材する目的で丸太を買って、それを賃挽させて納めて居る訳で、このことにつきましては、大阪も名古屋も大体同じような比率でありまして、やはり賃挽が多い訳であります。でどうして賃挽をさせて、工場事業者が販売しておるかということの色々きいてみますと、消費者は様々なむづかしい注文を持って来て、それに対し適格な製材をするためには、やはり北海道に対して注文をしたのでは駄目なのだ。駄目という意味はこれは非常に意味深長であります。それはいゆる甘味がないんでという事でございます。

### 消極的な北海道の工場

これは若干暴露的になって誠に申訳ないが、まあ私の暴言としてお許しを願いたいと思いますが、甘味がないということの意味は、北海道から、造船会社、車輛会社等に直接納材をせしめるようなルートを開いた場合には北海道の工場がすっかりうま味を取ってしまう。東京という所の中間過程を経ない流れになるのではないかとすると甘味がなくなるから遮断幕を張っておいて幕から向うえは産地の人達には立入らせなくしておいて、しかるべくやるということが、私は甘味がなくなるということの意味だろうと思うのであります。まあそのことの良し悪とか、又製材工場の合理化の問題にどう影響があるかわ、後程の話に致しますが、とにかく東京の工場が、自づから監督して賃挽させないと納入先ではそれを受取らない、山挽製品に付スズをかく、というようなことは、どうも一見不思議の訳であります。10年も15年も昔のように北海道と本州との交通の関係が非常に悪いとか、或いは通信運輸の関係がすこぶる不便だという段階におきましては、そういうことも一応ほうなずけることもありますがサアと云われてサアの間に合わないから丸太をたくわえておいて、火急の用に充てるという意味ならば解りますが、現段階のように、交通が発達し、連絡が緊密になっている場合にはもっと消費者と産地との連繫、理解の道が開かれてもいゝんではないか、その間に介在して取引条件を阻害したり、着しくはその阻害されて居る上にアグラをかいて、特殊の立場で利益をしているものがあつたとしたら、そういう者に対しては別途の形で考慮する必要もあるのではないかと、いうように私は、北海道の製材工場を見る場合には直言したい訳でございます。

### 消費と直結しないルートは考えもの

段々話しが脱線して参りまして恐縮ですが、何れに致しましても、北海道の製材工業の合理化を行う場合には、昨日も皆様の非常な御熱意によって目立の教習所が生まれましたが、目立の教習所の設立等によって立派な製品を作り、工場の歩止りを向上するということも非常に重要であります。もう一つ重要なことは、商業面に関しまして、つまり作ったものを適正価格でしかも安全な方法でお売りになるということに対し、製材工場の技術的な問題と相共にお考え願いたいので、そうすることによって、始めて本当の花を咲かせ実を結ぶものというように考えておる訳でございます。

非常に立派な製材技術が行われまして、製品の上では何等申し分がないといたしましても、それが最後に

商取引される場面において、何かそこに一つの喰違いがあつたとするならば、恐らくそれは徒勞に終るといふことになる訳でございます。私のこれは非常に独断的な推定ではあります。製材品が市場で愈々販売されるという場合の姿を卒直に表現しますなら、それは原木代と、労賃と運賃との三つを中心とした、諸費用が全部含んだものが製品という形で、一応こゝに出て来た訳でございます。だから若しその製品が適正な価格と方法で売れなかった場合には、これは原木の面にも又労賃にも、製材工場の経営諸掛りにもすぐ影響する訳で、すべてのそうしたものの集積された、製品というものは、余程販売に関し御注意なさる必要があると思ひます。言葉を強めて云うならば、そうした末端の点からもう一度研究されなければならぬ。そうすることが本当に消費者に対し親しまれる北海道であり良く云はれている愛される北海道というようになるのだらうと思ひます。そうでないとその中間、間接に何者かが入りましてルートが乱れますと、北海道でお示しになる御好意、御骨折というものが、末端に行つて果してその100%の効果を發揮しておるかどうかという点に対して、甚だ疑問も多いし、時には損にもなつて居るのではないかと、いうように考えられる訳でございます。

### 無視出来ない南洋材

さて話しを更に進めて行く上につきまして私はこゝで北海道材と一つの対立的な関係、対立と申し上げますと言葉が強うございますが、北海道の方として思ひを致さねばならない必要があると思ひますのは、もうすでに關心事になって居ります、南洋材の問題でございます。私には御当地に参りまして立派な建物の中にも盛んに南洋材が使われて居るのを見て意外の感に打たれた訳でございます。南洋材の毎年入つて参ります量はそれは馬鹿にならない量でございます。お役所の統計等では南洋材の1ヶ年の輸入量は830万石乃至850万石というような数量を提示されて居りますが、これを若し北海道材の寸検を用いますなら、所謂木場寸検に直しますと、850万石は約1,100万石位の数量になる訳で約25%位の増石になる訳であります。北海道の広葉樹の製材生産量はお役所の統計によりますと、1,200万石と記録されて居りまして、此の数と今申し上げました南洋材の輸入数量というものとは、略々逼逼して居ります。全国の広葉樹の丸太の生産量は2,400万石でありますから、その約半分の量に近いものが南洋材となる訳であります。いゝ換えますと日本における広葉樹の総生産量の大体約半分は南洋材で賄われている訳ですから、若し仮りに南洋材の輸入がなかつたと仮

定した場合には、北海道材の重要さというものは非常に大きくなって参ります。いつれにしましても南洋材というものは、これは広葉樹の領域のお話しをする上には一般に表わされている統計数字よりも実際においては、はるかに大きいもので、決して見逃すべからざるものであることをお考え置き願いたいと思います。

#### ラワン価格の半分は船運賃

全国の素材生産量のうち占める最大な量は、ナラとブナの丸太であります。この両者は大体年間 900万石といわれておりますが、先程申上げました南洋材の1,200万石と、全国のナラとブナの丸太の900万石を比べますと南洋材の方が遙かに多い訳で、いかに南洋材というものが広い販路を持ち、その消費領域がどんどん広がっていることが、この一事でも知られる訳であります。南洋材の大部分は、フィリッピン産のもので、何故日本にそのように沢山の量が入って来るかを考えて見ますと、やはりこれはフィリッピンにおける丸太の価格が安いということ以外に何もものもないようでございます。ごく大ざっぱに考えてみまして、東京における南洋材の平均価格を石当り 2,500 円と見ました場合に、大体その半分は船運賃でございます。だから産地価格は非常に安いものだということが云える訳で、その最大な価格変動要素は運賃でこの騰落が非常に大きな影響を及ぼして居ります。新聞等におきましても南洋材の相場を論ずる場合には、先ず運賃の動向を識かなかつたら、全然お話にならない程、意外に大きい訳であります。

#### 躍進自ざましい比国ベニヤ工場

最近フィリッピンにおきましても、ベニヤ工業及び製材工業は非常に振興しております。ベニヤ工業におきましては、7、8年前に比べまして最近の生産量は実に40倍という飛躍をして居り、年間合板の生産量は4億平方呎に達して居ります。我が国の合板工業の実状ら比べますとまだまだ幼稚ではあります。然し僅かか5、6年間に40倍もの躍進をしたということは、この状態を以って今後も進むならば、フィリッピンに於ける合板工業の進歩もかなりの注目すべきものがある訳であります。

#### ラワン丸太の輸入は将来望み薄

現在では日本がフィリッピンに於ける総生産量の約80%以上の丸太を買取って居りますが、その丸太を若し日本に出さずに、フィリッピンの国内で消費して、合板を造ったと仮定したならば、たちまちにして日本が世界各国に輸出して居ります、7億平方に近い合板の輸出市場を、フィリッピンが奪うことが出来る訳でそれ故にフィリッピン内部における国民運動としては

日本に丸太を輸出して、その輸出した丸太によって作られる合板と、フィリッピンの工場で作られた合板とが海外市場において、競争をして尚且、日本に負けているということは矛盾なのだから、日本に対して丸太の輸出を禁止すべきであるとの意見が、最近では議会でも非常に強く叫ばれて居ます。御承知のようにフィリッピンは、国民運動の盛んな国柄でして、やはり政治家諸公もそうした国粹的運動、つまり日本に対して丸太の輸出をシャット・アウトして、もって国内の合板工業、木材工業の繁栄に寄与するとの、うたい文句を掲げることによりまして、その政治的人気をつなぐことが出来ますから、フィリッピンの議会における丸太輸出の禁止運動は非常に激烈な口調で、日本の木材工業、就中合板工業に関して、敵対国のような言葉を持って対決している訳です。

然し乍ら比国の生産事情は、政治家がそおおしやっても、又合板業界がなんといおうとも、やはり日本え丸太のまゝ出すという条件のもとに成立している出材業者としては、直ちに国内で叫ばれて居ります与論に組みすることはせず、やはり日本えの丸太の輸出を非常に重視して居ります。然し重視して居りますが、国民運動としてラワン丸太の禁輸がハウハイとして起った場合に、製材業者、合板業者が容易に雷同することが考えられるわけで、その場合に丸太を生産し輸出している業者が、一体国民の与論を無視して、何時迄も日本えの輸出を盛んならしめている経営形態を持つか否か疑問でございまして、私はやがては南洋材の我が国に対する輸入が非常に制限される機会が来るのではないかとひそかに思っている次第であります。

南洋材の将来を論ずる者も、日本えの輸入が段々に減る運命にあると申しますが、その論旨というものがフィリッピンに於ける乱伐が行なわれて、いくら成長の早い南洋に於いても忽ち資源が枯渇するだろう、その場合には輸出能力がなくなるので、輸出が殆んど止ってしまうだろうと申します。その時期は早い人は5年後だとか、やゝ中間の人で10年とかいう説を持っておりますが、免に角資源の枯渇が激化すればする程、それ以前に国民運動に油をそそぐ結果になりますから一層早くこの問題が実現することになる訳であります。

#### 南洋材に依存する内地の工場

反面御承知のように本州各地の合板工場は、全く南洋材に依存して、その生産組織というものは、大きな丸太をロータリーにかけて、大きなサイズのベニヤを量産するという方向に完全に切替えられてしまつて居ります。これは合板工場ばかりでなく製材工場にも云

えることです。

これについて最近こういうエピソードがあります。  
 現在ソ聯のエゾ、トドの輸入が全くの凍結状態で取引が行なわれておりません。その理由は何にかと申しますと、ソ聯のこうした小さい丸太を製材する工場が深川には殆んどありません。ラワンの質挽製材工場ならいくらかでもありまして、それなら恐らく大体石当り300円内外の質挽料金で製材致します。ところがソ聯材の中小丸太となりますと、石当り500円でも質挽の引受手がないということになりますと、単価の安い製品を500円も600円もの質挽代を出したのでは、採算がとれません。ですからソ聯材が製材されない訳でありまして、そのことは前述したように、製材工場が南洋材を対照とするように、ここ数年の間にすっかり切替られて、小径木を挽く工場は全く無くなってしまったからであります。

余談ではございますが、現在では東京市場では杉の5.5寸下の小丸太は相場がたっておりません。もともと御承知のように、吾が国に於ける針葉樹製品の価格の指標となるものは杉の5.5寸下の小丸太ですが、その動向をうらなうことが出来るというので、林野庁、その他に於きましても、現在でも杉の5.5寸下の小丸太の価格を、総べての木材価格の指標に取っております。ところがなんと不思議にも東京ではここ数年来、杉の5.5寸下の丸太を製材する工場は殆んど1、2の工場になってしまいました。然かもそれは15馬力か20馬力位の小工場で、大工場では全く小丸太は挽いて居りません。事程左様に南洋材は東京市場におきましても、製材工場の重要な資材になつております。然し近い将来にはどうなるだろうかとお考えおき下さる必要があると思ひます。結論を要約しますと私は南洋材は長い間続くものではない。必らず近く転換期がやって来ると思ひます。然し転換期が今後5年後なり7年後なりにありますとしますと、本州の製材工場、若しくは合板工場では此の際一刻も早く設備の原価消却をいたさなければなりません。従つて現在生産過剰と云われております、ラワンベニヤ、或はラワンの二次板、吋板等の生産も、工場の設備の原価消却を急ぐためには、価格上若干損でも生産をせざるを得ない状態に於て南洋材が見せかけの繁忙を来たしているの、将来共此の状態でどんどん進んで行くものではなくて、なんといふますか、ローソクが消える直前には急に燃えさかるといふことがありますが、あれと同じように下向に向う直前で、今花を咲かせているという見方をしても、之れは余りひどい見方ではないと私は考へて居ります。

ソ聯材は市場に影響なし

尚最近一つの話題を提供して居りますのは、ソ聯からシラカバの丸太が入って来て居りまして、これは昭和6、7年頃の事ですが、沿海州地方から立派なトド丸太とか、ナラ丸太が入って参りまして、日本の合板工場が、当時未だ南洋材が余り盛んに使われていない時代で、それを使用して大いに成功した合板工場があったのですが、そんな関係で日本の一部の合板業者はソ聯から広葉樹の丸太の引合いがあったことに関してかなり小躍りして喜んだことがあったのですが、然し入って来たものは、なんと小さいもので、恰も北海道に於ける二次林のシラカバと同じようなもので、林業指導所の土場に積んでありました広葉樹丸太（註維織板原料用のシラカバ、シナ等の小径木で径は3寸~6寸程度のもの）と同じような径の丸太で、もっと外見の悪いものであり、全く製材の対照にはなりません。もっとも単価も安く港着で1,700円位でしたが例のホモゲンホルツ工場で大部分引取りまして、ホモゲンの原料に使われて居ります。従つてソ聯からカバ丸太が入って来たことは、噂に上ったり或いは何かの場合に一つの話題を提供しようが、現在入って居るものに関する限り又あの附近を巖なく御覧になった人のお話しによりましても、日本の広葉樹資源の不足をカバーするとか、或いは日本の広葉樹生産に何か悪影響を及ぼすような価格で、ソ聯からカバ丸太乃至はその他の広葉樹丸太が入って来るといふことは考へられない訳で、その点は御安心になって然るべきだと考へます。

— 木材商工研究会主幹 —  
 — 日本木材加工技術協会理事 —

### 10月号 正 誤 表

| 4 P 第1表中   | 製材屑木欄    |
|------------|----------|
| 誤          | 正        |
| 6.260才は    | 61.260才  |
| 417.3000才は | 417.300才 |
| 473.560才は  | 478.560才 |
| 鋸屑欄        |          |
| 47.002は    | 47.002才  |

北海道に於ける製材工場の経営合理化について

宮原省久

去る 10 月 2 日鋸目立技術教習所の開所を記念して、日本木材加工技術協会北海道支部、北海道林産技術普及協会の共催にて製材に関する特別講演会が催された。当日は講師として、日本木材加工技術協会理事、宮原省久氏が“北海道における製材工場の経営合理化について”と題して下記の講演を行った。

講演要旨

私、只今御紹介に預りました宮原省久でございます。実は私此の度北海道から、何か来て話せとお話しがあつたのでありますが、非常に恐れ入った訳でございます。と申しますのは、北海道には、林業指導所、それから林業試験場北海道支場や、その他の諸先生が沢山いらっしゃるし、又業界に致しましても、非常に立派な工場が沢山ありまして、いずれも壮々たる経営者の方々ばかりで、私は常に敬服している次第でございます。そこへ参りまして“北海道に於ける製材工場の経営合理化、”ということを目題として、ダンビラをかざしたところが、それは全くコッケイ極まることに終るだろうという気持があつた訳でございます。然しそれはそれといたしまして、そういうお歴々の中におきまして、私のような者でも、常々考えていることを率直に申し上げ、又特別の見方、恐らくそれは、クダから空を見るような見方であるかも知れませんが、何れにしましても、私が北海道のことに關して、ここでお話しをして、お答を受けるということが、一つの何かのお役に立てば幸いなことと考えて参つたのであります。これから私がお話し申し上げることは、非常に雑駁なことでございます。恐らくその間には前後矛盾し、又非常に見当違いのこともあると思ひます。こういう点については、どうか御叱正願ひたいと思ひます。私はここで決して講演をするというような大それた考えでは参つて居りません。一つその点重々お含みの上御聴取り願ひたいと思ひます。

さて北海道のことを申し上げる前に私が考えます。日本における製材工場の全体について申し上げておくほうが、話を進めて行く上に都合が宜しいと思ひまして、蛇足と思ひますが一寸前置きさせていただきます。

過剰な馬力数

御承知のように日本の製材工場は、現在その数が 3 万を超えて居ります。馬力数も 72 万馬力という沢山の馬力を擁しておりますが、然し此の 3 万という工場が一体どのような形で動いているかを見た場合、非常に意外のことにぶつかるのでございます。といひますことは私の非常に粗雑な推定でございますが、3 万という工場があつて、72 万という大きな馬力を擁しておりますと、現在日本で生産して居ります丸太の約 3 倍位の量を、工場へ持って行かないと、恐らく工場は一応の円滑な運転が出来ません。又、若しそういうことをやつた場合には、我が国現在の木材需要量の 2 倍位の量が市場に流れて参ります。

吾々は普段原木高の製品安というようなことを云つておりますが、若し之れが、反対に原木が安く、ふんだんに提供されましたならば、製材工場はフルに操業して、その結果製材工場の利潤はどんどん上つて行き又製材工場の合理化もどんどん出来ると云うことになる訳でございます。然し若し仮にもそういうことが行なわれた場合には、たちまち過剰生産がそこに現われまして、現在の原木高の製品安で苦難して居ります場合と違つた形の苦難が現われて来ることが、予想される訳でございます。

勿論そういう場合にも品物が安くどんどん提供されますと、現在とは違ひまして、木材の用途も拡大されましようし、又住宅難等の問題にも大いに貢献するところがあつて、結構ではございますが、然し何れにしましても、製材工場の馬力の多すぎるといふことは、どの面から見ましても一つのこれは問題点であると思ひます。

普通計算されて居ります数字によりますと、日本の製材工場は、一工場当りの平均馬力は 23.39 馬力、1 馬力当りの 1 日原木消費石数はなんと 0.75 石でございます。又労務者一日一人当りの原木消費は 2.49 石約 2.5 石位になっております。

一馬力当りの一日の原木消費が 0.75 石ということ、これは皆さんの工場の実体からお考えになりますと、

非常に少ない。そういうことが一体統計上ではどうして現われるのだろうかという疑問が生れて来ると思いますが、製材工場の中には稼働時間が非常に短いものがある。若しくは稼働が不定期のものがある。手持の原木がないとか、或いは販売上の色々の問題があるとかで、充分能力が発揮出来ない工場が意外に多い訳でございます。私北海道の様子につきましては詳かではありませんが、本州に於ける製材の中心地と云われております静岡県、或いは和歌山県におきまして、その製材工場の実態調査に参りまして色々お話しをきいて見ますと、0.75 石の一日一馬力当りの製材工場はまだ宜しい方で、この半分位の工場が、少なからず見受けられる訳でございます。最初は調査に参りまして御報告下さる製材工場の挽材率が非常に小さいので不思議に思い、或いは之れは私と、税務署の関係とが関係しておいて、私に本当のことをお話しすると、私の書いたものとか、若しくは私の話したのから、税務署の方へつつ抜けになって、税金に影響するので、私しには低く目低く目と、御説明下さるんだというように邪推をして、皆さんのお話しを承っていた訳でございます。之れは私として誠にまずい考えでございました。実際数ヶ所の工場へ入りまして一日の記録を集めて見ますと、やはり 0.5 石位の製材しか挽いていないということは、茲に出て参ります 0.75 石というものはやや真実に近いものであって、之以上の製材はしていないだろうということになるのでございます。

何れにしましても製材工場が型の大き過ぎる馬力を擁して、その馬力が然かも半ば有休状態における一つの大きな問題点だろうというように考えて居ります。

#### 北海道は大規模工場

昭和 33 年 6 月の農林統計調査部の調査によりますと、北海道の工場数は 1,240 と出て居ります。これは全国の工場数 3 万に対しまして約 4% となって居ります。全国的に見て馬力を考えず只製材工場の数のみを考えた場合には、1,000 以上の製材工場を持つておる県は新潟県が約 1,100、長野県が 1,000、岐阜県が 1,000、静岡県が 1,100、愛知県が 1,000、広島県が 1,100 であります。しかしここでは全く小さい 15 馬力か 20 馬力という工場が普通でそれ以上の工場は一応大工場として扱われています。製材工場は極く小規模のものが普通である。又そういうものでないとこの諸県では殆んど仕事が成り立たない訳でございます。

北海道の製材工場は全国の総工場数に対する僅か 4% という低い数でございますが、之れを馬力数において見ますと全国の 72 万馬力に対しまして、6 万 3 千馬力となっております。これは総馬力の 8.7% に当りますので北海道の製材工場は非常に規模が大きいことになる訳でございます。本州諸県におきまして馬力の大きい工場は、これは静岡県が第一番でありまして 3 万 1 千馬力を持つております。之れは北海道に比べますと約  $\frac{1}{2}$  であります。愛知県がずっと下りまして 2 万 9 千、日本における最大の木材王国と云われております秋田でさえも僅か 2 万 5 千に満たないという状態でございます。天竜を控えております静岡が 3 万で、愛媛、長野が共に 2 万 4 千であります。

#### 本道の広葉樹消費は全国の 28%

馬力の状態は以上の通りであります。之れを素材の消費石数から見ますと、この 6 月を例にとりますと、北海道では 129 万 7 千石という数字が現われております。6 月という月がどういう月か私は良く存じませんが、とにかく莫大な能力を発揮して居る訳でございます。これを全国の 33 年 6 月における消費石数から見ますと 14.3% という数に当って居ります。その内訳は大體針葉樹 79 万 5 千石、広葉樹 50 万 2 千石となっております。これは針葉樹の場合には全国の総製材量に対する 10.9% 約 11% が北海道の生産になっております。ところが広葉樹におきましては全国の総原木消費量に対しまして、なんと驚くべし北海道は 28.2% という大きな数字を示しております。之れは 6 月のみの数でありますので年間を通じては若干異動はあると思いますが、とにかく 28% という数字が丸太挽材総量における北海道の占めるウエイトでございます。

此の 6 月を基準にして逆算しますと 1 ヶ年では 1,550 万石という数字になる訳で、製材工場の能力の大きさ製材工場における、特に広葉樹における北海道の占める量ということ是非常に大きな問題でございます。従って私がこれからしばしばふれる問題もこの広葉樹問題を中心にして申し上げたいと考えて居ります。

#### 丸太のままの移出は考えもの

北海道の広葉樹生産を申上げることについて、やはり本州との対比を申上げる必要があると思います。本州で広葉樹の製材量の多い県と申しますと、東京、大阪、やや下りまして愛知、静岡となっております。東京の 6 月中の広葉樹丸太消費は 19 万 6 千石、大阪 14



万石で、愛知が 10 万石、静岡 6 万石となっております。ところが今申し上げました東京、大阪、愛知という反面、これらの県では広葉樹丸太は殆んど生産しておりません。恐らく北海道から丸太がもたらされ、それが消費されているということで、そのままの製材工場の広葉樹挽材能力というものは、北海道の丸太生産に強く

依存しておるといことになる訳でございます。この傾向は最近では減少しておりますが、戦前若しくは戦争直後の数年間は恐らくもっと北海道の丸太への依存度が高かったろうと考えて居るのであります。従ってもし北海道からの丸太の供給が止まった場合には、東京、大阪、愛知の如き場所の広葉樹製材工場の仕事はずっと減少して行くことになる訳でございます。私はこのことにつきまして何れ後段でも申し上げますが、一体北海道から東京、大阪、愛知、名古屋へ丸太を輸出して、ここで製材されなかったならば、此の地方での製材の消費にマッチしないものであろうか、このことが大きな問題になると思います。もっと率直に申し上げますと、一体高い運賃をかけて丸太を製材して、製品として他の地方へ出すことによりかなり大きく問題が解決するのではないかと、……このことは、いわゆる北海道に対してこういう例をとるのは誠にまずいのでございますが、木材業における後進的の地方では丸太を輸出して、先進的の地方の製材工場の喰物を提供しているのが、世界に於ける木材需給の全般であり、又いわゆる製材業における後進国と先進国との関係でありまして、これは各国とも大きな問題となっている点であります。

#### 脱し切れない北海道の後進性

然しこれを北海道の場合にそのままいわゆる後進国というようなレッテルを貼ることに対して、私は決して自身を持っている訳ではありませんが、とにかく北海道の場合にはこうした後進国的なという言葉は非常に悪うございますが、後進国的な要素が未だ若干残っているという点は見逃し得ない点だと思っておりますのでございます。

勿論本州、四国、九州におきましても、広葉樹の生産はある訳でありますが、その生産たるや誠に微々たるもので、本州における広葉樹素材の有力生産県と目されて居る岩手県の場合では6月中の丸太消費は8万1千石でこれは東京の $\frac{1}{2}$ 以下であります。更に岐阜県では7万9千石、福島県で6万石、秋田県で4万8千石で群馬県で4万4千石、青森県が3万4千石、栃木県、広島、愛媛、宮崎県となりますと、これはもう3万台になってしまいます。恐らく北海道の大きな一工場の消費位に落ちてしまうということでございます。

岩手、岐阜、福島等の諸県はブナが主でございますが奥地開発と共にブナの丸太が出て参りますから、こうした成績を挙げておりますが、若し奥地開発が行なわれなるとしますと、殆んど広葉樹は“くりもの”とか或は極く小さな製材工場の特殊資材以上には役割を果していないということであります。愛媛、宮崎地方になりますと、ブナは無くなりまして、古いタブの木が多く、シイ、タブのような木は、利用の点について中々むずかしい問題がありましたが、こうした贅沢はいつておられなくなり、盛んに使用されるようになったので、このように月間消費が全県を通じて2万石という数字を見ている訳であります。それにしても資源は存外少ないようでありまして、之れを3倍、5倍というような広葉樹の消費力を伸すためには中々容易ではないと吾々は見受けて居ります。

#### 東京は賃挽工場が多い

先程私は東京、大阪、愛知等が非常に広葉樹丸太の消費が多く、然かも北海道からの供給丸太が多いと申しましたが、これと関連しまして東京では、賃挽工場で製材される分が俄然多い訳であります。6月中の実績を見ますに、その81%に当る数量が賃挽工場で挽かれ約19%が自家工場で挽かれて居ります。おそらく賃挽工場で挽かれる81%の数の中には、少なからざる量が北海道から参っておるのではないかと推察が出来るのであります。

元来東京の広葉樹の消費勢力といいますが、取引の秩序は製材工場を所有している人が、自家工場の資材として丸太を北海道から仕入ているような場合は極く少ない訳でありまして、広葉樹の扱商社、若しくは広葉樹の製材品を、車輛会社又は造船会社等に納材する目的で丸太を買って、それを賃挽させて納めて居る訳で、このことにつきましては、大阪も名古屋も大体同じような比率でありまして、やはり賃挽が多い訳であります。ではどうして賃挽させて、工場事業者が販売しておるかということの色々きいてみますと、消費者は様々なむずかしい注文を持って来て、それに対す適格な製材をするためには、やはり北海道に対して注文をしたのでは駄目なのだ。駄目という意味はこれは非常に意味深長であります。それはいわゆる甘味がないんでという事でございます。

### 消極的な北海道の工場

これは若干暴露的になって誠に申し訳ないが、まあ私の暴言としてお許しを願いたいと思いますが、甘味がないということの意味は、北海道から、造船会社、車輛会社等に直接納材をせしめるようなルートを開いた場合には北海道の工場がすっかりうま味を取ってしまう。東京という所の中間過程を経ない流れになるのではないかとそうすると甘味がなくなるから遮蔽幕を張っておいて幕から向うへは産地の人達には立入らせなくしておいて、しかるべくやるということが、私は甘味がなくなるとということの意味だろうと思うのであります。まあそのことの良し悪とか、又製材工場の合理化の問題にどう影響があるかは、後程の話に致しますが、とにかく東京の工場が、自ら監督して賃挽させないと納入先ではそれを受取らない、山挽製品では仲々文句がつく、というようなことは、どうも一見不思議の訳であります。10年も15年も昔のように北海道と本州との交通の関係が非常に悪いとか、或いは通信運輸の関係がすこぶる不便だという段階におきましては、そういうことも一応はうなづけることもありますがサアと云われてサアの間に合わないから丸太をたくわえておいて、火急の用に充てるという意味ならば解りますが、現段階のように、交通が発達し、連絡が緊密になっている場合にはもっと消費者と産地との連繫、理解の道が開かれてもいいのではないかと、その間に介在して取引条件を阻害したり、若しくはその阻害されて居る上にアグラをかいて、特殊の立場で利益をしているものがあつたとしたら、そういう者に対しては別途の形で考慮する必要もあるのではないかとこのように私は、北海道の製材工場を見る場合には直言したい訳でございます。

### 消費と直結しないルートは考えもの

段々話しが脱線して参りまして恐縮ですが、何れに致しましても、北海道の製材工場の合理化を行う場合には昨日も皆様の非常な御熱意によって目立の教習所が生れましたが、目立の教習所の設立等によって立派な製品を作り、工場の歩止りを向上するというのも非常に重要であります。もう一つ重要なことは、商業面に関しまして、つまり作ったものを適正価格でしかも安全な方法でお売りになるということに対し、製材工場の技術的な問題と相共にお考え願いたいのでそうすることによって、初めて本当の花を咲かせ実を結ぶものというように考えておる訳でございます。

非常に立派な製材技術が行われまして、製品の上では何等申し分がないといたしましても、それが最後に商取引される場面において、何かそこに一つの喰違いがあつたとするならば、恐らくそれは徒労に終るとということになる訳でございます。私のこれは非常に独断的な推定ではありますが、製材品が市場で愈々販売されるという場合の姿を卒直に表現しますなら、それは原木代と、労賃との三つを中心とした、諸費用が全部含んだものが製品という形で、一応ここに出て来た訳でございます。だから若しその製品が適正な価格と方法で売れなかった場合には、これは原木の面にも又労賃にも、製材工場の経営諸掛りにもすぐ影響する訳で、すべてそうしたものの集積された、製品というものは、余程販売に関し御注意なさる必要があると思ひます。言葉を強めて云うならば、そうした末端の点からもう一度研究されなければならない。そうすることが本当に消費者に対し親しまれる北海道であり良く云われている愛される北海道というようになるのだらうと思ひます。そうしないとその中間、間接に何者かが入りましてルートが乱れますと、北海道でお示しになる御好意、御骨折というものが、末端に行つて果してその100%の効果を発揮しておるかどうかという点に対して、甚だ疑問も多いし、時には損にもなつて居るのではないかとこのように考えられる訳でございます。

### 無視出来ない南洋材

さて話しを更に進めて行く上につきまして私はここで北海道材と一つの対立的な関係、対立と申し上げますと言葉が強うございまして、北海道の方として思いを致さねばならない必要があると思ひますのは、もうすでに關心事になって居ります、南洋材の問題でございます。私は御当地に参りまして立派な建物の中にも盛んに南洋材が使われて居るのを見て意外の窓に打たれた訳でございます。南洋材の毎年入つて参ります量はそれは馬鹿にならない量でございます。お役所の統計等では南洋材の1ヶ年の輸入量は830万石乃至850万石というような数量を提示されて居りますが、これを若し北海道材の寸検を用いますなら、所謂木場寸検に直しますと、850万石は約1,100万石位の数量になる訳で約25%位の増石になる訳であります。北海道の広葉樹の素材生産量はお役所の統計によりますと、1,200万石と記録されて居りまして、此の数と今申し上げました南洋材の輸入数量というも

のとは、略々逼適して居ります。全国の広葉樹の丸太の生産量は 2,400 万石でありますから、その約半分の量に近いものが南洋材となる訳であります。いい換えますと日本における広葉樹の総生産量の大体  $\frac{1}{3}$  位は南洋材で賄われている訳ですから、若し仮りに南洋材の輸入がなかったと仮

定した場合には、北海道材の重要さというものは非常に大きくなって参ります。いずれにしても南洋材というものは、これは広葉樹の領域のお話しをする上には一般に表わされている統計数字よりも実際においては、はるかに大きいもので、決して見逃すべからざるものであることをお考え置き願いたいと思います。

#### ラワン価格の半分は船運賃

全国の素材生産量のうち占める最大な量は、ナラとブナの丸太であります。この両者は大体年間 900 万石といわれておりますが、先程申上げました南洋材の 1,200 万石と、全国のナラとブナの丸太の 900 万石を比べますと南洋材の方が遙かに多い訳で、いかに南洋材というものが広い販路を持ち、その消費領域がどんどん広がっていることが、この一事でも知られる訳であります。南洋材の大部分は、フィリピン産のもので、何故日本にそのように沢山の量が入って来るかを考えて見ますと、やはりこれはフィリピンにおける丸太の価格が安いということ以外に何もものないようでございます。ごく大ざっぱに考えてみまして、東京における南洋材の平均価格を石当り 2,500 円と見ました場合に、大体その半分は船運賃でございます。だから産地価格は非常に安いものだということが云える訳で、その最大な価格変動要素は運賃でこの騰落が非常に大きな影響を及ぼして居ります。新聞等におきまして南洋材の相場を論ずる場合には、先ず運賃の動向を書かなかつたら、全然お話にならない程、意外に大きい訳であります。

#### 躍進目ざましい比国ベニヤ工場

最近フィリピンにおきまして、ベニヤ工業及び製材工業は非常に振興しております。ベニヤ工業におきましては、7、8 年前に比べまして最近の生産量は実に 40 倍という飛躍をして居り、年間合板生産量は 4 億平方フィートに達して居ります。我が国の合板工業の実状ら比べますとまだまだ幼稚ではありますが然し僅か 5、6 年間に 40 倍もの躍進をしたということは、この状態を以って今後も進むならば、フィリピンに於ける合板工業の進歩もかなりの注目すべきものがある訳であります。

#### ラワン丸太の輸入は将来望み簿

現在では日本がフィリピンに於ける総生産量の約 80%以上の丸太を買取って居りますが、その丸太を若し日本に出さずに、フィリピンの国内で消費して、合板を造ったと仮定したならば、たちまちにして日本が世界各国に輸出して居ります、7 億平方に近い合板の輸出市場を、フィリピンが奪うことが出来る訳でそれ故にフィリピン内部における国民運動としては日本に丸太を輸出して、その輸出した丸太によって作られる合板と、フィリピンの工場で作られる合板と、フィリピンの工場で作られた合板とが海外市場において、競争をして尚且、日本に負けているということは矛盾なのだから、日本に対して丸太の輸出を禁止すべきであるとの意見が、最近では議会でも非常に強く叫ばれて居ます。御承知のようにフィリピンは国民運動の盛んな国柄でして、やはり政治家諸公もそうした国粹的運動、つまり日本に対して丸太の輸出をシャット・アウトして、もって国内の合板工業、木材工業の繁栄に寄与するのと、うたい文句を掲げることによりまして、その政治的人気をつなぐことが出来ますから、フィリピンの議会における丸太は輸出の禁止運動は非常に激烈な口調で、日本の木材工業、就中合板工業に関して、敵対国のような言葉を持って対決している訳です。

然し乍ら比国の生産事情は、政治家がそうおっしゃっても、又合板業界がなんといおうとも、やはり日本へ丸太のまま出すという条件のもとに成立している出材業者としては、直ちに国内で叫ばれて居りますと論に組することはせずに、やはり日本への丸太の輸出を非常に重視して居ります。然し重視して居りますが、国民運動としてラワン丸太の禁輸がハウハイとして起った場合に、製材業者、合板業者が容易に雷同することが考えられるわけで、その場合に丸太を生産し輸出している業者が、一体国民の与論を無視して、何時迄も日本への輸出を盛んならしめている経営形態を持つか否か疑問でございまして、私はやがては南洋材の我が国に対する輸入が非常に制限される機会が来るのではないかとひそかに思っている次第であります。

南洋材の将来を論ずる者も、日本への輸入が段々に減る運命にあると申しますが、その論旨というものがフィリピンに於ける乱伐が行なわれて、いくら成長の早い南洋に於いても忽ち資源が枯渇が激化するだろう、その場合には輸出能力がなくなるので、輸出が殆んど止ってしまうだろうと申します。その時期は早い人は 5 年後だとか、やや中間の人で 10 年とかいう説を持ってありますが、免に角資源の枯渇が激化すればする程、それ以前に

国民運動に油をそそぐ結果になりますから一層早くこの問題が実現することになる訳であります。

南洋材に依存する内地の工場

反面御承知のように本州各地の合板工場は、全く南洋材に依存して、その生産組織というものは、大きな丸太をロータリーにかけて、大きなサイズのベニヤを量産するという方向に完全に切替えられてしまっていて居ります。これは合板工場ばかりでなく製材工場にも云

えることです。

これについて最近こういうエピソードがあります。

現在ソ連エゾ、トドの輸入が全くの凍結状態で取引が行なわれておりません。その理由は何かと申しますと、ソ連のこうした小さい丸太を製材する工場が深川には殆んどありません。ラワンの賃挽製材工場ならいくらかでもありまして、それなら恐らく大体石当り 300 円内外の賃挽料金で製材致します。ところがソ連材の中小丸太となりますと、石当 500 円でも賃挽の引受手がないということになりますと、単価の安い製品を 500 円も 600 円もの賃挽代を出したのでは、採算がとれません。ですからソ連材が製材されない訳でありましてそのことは前述したように、製材工場が南洋材を対照とするように、ここ数年の間にすっかり切替られて、小径木を挽く工場は全く無くなってしまったからであります。

余談ではございますが、現在では東京市場では杉の 5.5 寸下の小丸太は相場がたっておりません。もともと御承知のように、吾が国に於ける針葉樹製品の価格の指標ともなるものは杉の 5.5 下の小丸太ですが、その動向をうらなうことが出来るというので、杉野庁、その他に於きまして、現在でも杉の 5.5 下の小丸太の価格を、総べて木材価格の指標に取っております。ところがなんと不思議にも東京ではここ数年来、杉の 5.5 下の丸太を製材する工場は殆んど 1、2 の工場になってしまいました。然かもそれは 15 馬力が 20 馬力位の小工場、大工場では全く小丸太は挽いて居りません。事程左様に南洋材は東京市場におきまして、製材工場の重要な資材になっております。然し近い将来にはどうなるだろうかとお考えおき下さる必要があると思えます。結論を要約しますと私は南洋材は長い間続くものではない。必らず近く転換期がやって来ると思っております。然し転換期が今後 5 年後なり 7 年後なりにありますとしますと、本州の製材工場、若しくは合板工場では此の際一刻も早く設備の原価消却をいたさなければなりません。従って現在生産過剰と云われております、ラワンベニヤ、或はラワンの二次板、インチ板等の生産も、工場の設備の原価償却を急ぐためには、価格上若干損でも量産をせざるを得ない状態にあって南洋材が見せかけの繁忙を来たしているので、将来共此の状態ですでにどんどん進んで行くものではなくて、なんといいですか、ローソクが消える直前には急に燃えさかるといふことがあります、あれと同じように下向に向う直前で、今花を咲かせているという見方をしても、之れは余りひどい見方ではないと私は考えて居ります。

ソ連材は市場に影響なし

尚最近一つの話題を提供して居りますのは、ソ連からシラカバの丸太が入って来て居りまして、これは昭和 6、7 年頃の事です、沿海州地方から立派なトド丸太とか、ナラ丸太が入って参りまして、日本の合板工場が、当時未だ南洋材が余り盛んに使われていない時代で、それを使用して大いに成功した合板工場があったのですが、そんな関係で日本の一部の合板業者はソ連から広葉樹の丸太の引合いがあったことに関してかなり小躍りして喜んだことがあったのですが、然し入って来たものは、なんと小さいもので、恰も北海道に於ける二次林のシラカバと同じようなもので、林業指導所の土場に積んでありました広葉樹丸太（注繊維板原料用のシラカバ、シナ等の小径木で径は 3 寸～6 寸程度のもの）と同じような径の丸太で、もっと外見の悪いものであり、全く製材の対照にはなりません。もっとも単価も安く港着で 1,700 円位でしたが例のホモゲンホルツ工場で大部分引取りまして、ホモゲンの原料に使われて居ります。従ってソ連からカバ丸太が入って来たことは、噂に上ったり或いは何かの場合の一つの話題を提供しますが、現在入って居るものに関する限り又あの附近を晨なく御覧になった人のお話によりまして、日本の広葉樹資源の不足をカバーするとか、或いは日本の広葉樹生産に何か悪影響を及ぼすような価格で、ソ連からカバ丸太乃至はその他の広葉樹丸太が入って来るといふことは考えられない訳で、その点は御安心になって然るべきだと考えます。

- 木材商工研究会主幹 -  
- 日本木材加工技術協会理事 -

10月号 正 誤 表

4P 第1表中 製材屑木欄  
誤 正

|             |           |
|-------------|-----------|
| 6.260 才は    | 61.260 才  |
| 417.3000 才は | 417.300 才 |
| 473.560 才は  | 478.560 才 |

鋸屑欄

|          |          |
|----------|----------|
| 47.002 は | 47.002 才 |
|----------|----------|